

東京都新宿区新宿のミニ雑誌「あごら」 ●何でも言える
 ●何でも書ける ●小誌な「ひろば」=AGORA・「あごら」
 ●あなたの声を待ってます。みんなてつくる「あごら」
 (03)354-9014 振替 東京0-5264

あごら

MINI 〈4月号〉
 1978年4月10日発行 ¥100 千50

続読「ホンネを語る」特集

「あごらミニ2号」に発表された、「あごら東海」有志による座談会、「夫についてホンネを語る」は、「中年の主婦の内面のかつとうを見事にえがき出した」(月刊「社会教育」五十二年七月号ほか)という評価を受けた。一方、「あごら北海道」では、「私たちはホンネを語り続けてきたけれど、わりきれないものを感じている」と、「ミニ11号」にその話し合いを掲載した。これに対して、読者の齊藤信彦氏(三鷹市在住・産婦人科医)から、「あごら」らしからぬ次元の低い論争に失望 ①こんな人と結婚しないでよかった ②ダンナが気の毒だ、伸びる芽をつまれているに違いない ③性の本当のエクスタシーをご存知ない」との論が来たため、もう少し詳しく述べていただくよう依頼した。これに対して夫妻の対談のテープが送られてきた。正直に言っただけのなかみにはガツカリしたのだが、これは平均的な日本人の考え方を示しているように思われるので、誌上に紹介し、さらに「あごら北海道」有志の考えを述べることにした。(この論の基になっている2号、11号を読みたい方は、事務局へお申し込みを。千とも一部百円)



今月のなかみ

続読「ホンネを語る」特集……………	1
イラスト 渡部 謙(あごら賛助会員)……………	1
ミニ11号「結婚についてホンネを語る」を読んで……………	2
性別分業制を考える―齊藤夫婦のテープを聞いて― 齊藤信彦・富士子……………	6
山口雅弘・里子……………	14
ふたりで話してみたら あごら北海道有志……………	16
カット 鈴木トミエ・山口里子……………	16
お知らせ 女のつとめ・女の講座……………	16

〔特別講演会〕

全米女性会議その後と

国際婦人年セミナー

ヒューストンの全米女性会議傍聴以来五か月間滞米していた「あごら編集部」の河野貴代美さんが帰日しました。

FRA 成立へ、残る三州の採否をめぐっての攻防戦、ますます定着する「草の根女解放運動」、NGO主催の国際婦人年セミナーの状況など、生きた情報を報告してもらいながら、今後の私たちの運動展開について語り合いたいと思います。

●時間 五月十三日(土) 午後二時～五時

●場所 四谷公会堂・三階

会議室(新宿一丁目)バス停一分

地下鉄「新宿御苑前」より徒歩五分

(三四一)二九九一
 ●参加費 二百円(非会員は三百円)

“夫について ホンネを語る” を読んで

齊藤信彦・富士子

◆医学的にも違う男と女

M こんな家庭生活を送っていてもプラスにならないということをいろいろ言ってるわけだけど、彼女たち、望んで結婚したわけでしょ。また、知っていた。いまの日本の家庭生活のありかたが、女に非常に不利だということも、そんなに急に改まるもんじやないってことも…。

W 何とか自分たちで改革しようとするのなら、自分でやるよりほかしようがないわけですよ。だから、そういう具体的な話が出てくればいいけど、家庭生活は女性が自立しようとするものを奪って

いるとか、なんかおかしいわね。

M 「社会のひずみや圧力のために、私たちの間にこんなヒビが入ってしまう」なんてのは、子どもは太陽だ、神様だ、子どもが悪いことをするのは社会が悪い、といった考えと同じだと言いたくなるな。自分というものがいつも先にならない。飛躍しちゃってる。だから「別れるとしたらもう結婚はゴメン。今度は深い人間関係を持つ男と出会っても、結婚はしない」なんて、世迷いごとみたいなことを言う。

W これじゃあ、うまくいかないですよ。ね。

M このKって人、三十一歳、結婚六年子どもが一人。もう、よろめきドラマとか何かそのあれとね、こんがらがっちゃってるのね。だからアタマに来ちゃった。

W ほんとに、どのくらい努力してるのかってことね。もう結婚はいやだ。なんて簡単に言ってるけど。

M ポーポワールを全部読んでるわけじゃないけど、ポーポワールなんかは、本気になって女は造られるって思ったんじやなくて、彼女が世に出る手段としてあるなことを言ったと思ってるのだけど、もし本気になって女は造られるなんて思ってたんならとんでもない間違いで、赤ん坊がオギャーと生まれたその声からして男か女かわかるって言われるくらいですよ。医学的に言えば血液の濃さが全然違うし、色素の数も違う。男は筋肉労働に向いているようにできてるし、女は出血とかストレスに強い。そんなものを無視して「女は造られる」なんて、言い出しただ。これが大変な影響力をもってますよ。

ている。現在の女権運動の原点が皆ここにあるのだから、皆おかし。

たしかに女性って、ゆがめられてきたし、しいたげられた面があるにしても、どうしてそうなったかを考えもしないで現象面だけとらえて言う、非常におかしいことになると思う。オリンピックの記録のことまで言うとか笑われちゃうけど、それだけおっしゃるなら女子男子なんて区別なく競技させれば良いと言いたくなる。

男らしさ、女らしさというすぐ問題になるけど、男は男の男らしさを武器にして男でなきゃできないものをやる。女は女でなきゃできないものを徹底的に武器にする。男と女ってのは、二人で一つの単位であって、男だけでもダメだし、女だけでもダメだということの一体感がないとつまらない。けれどもこの人たちがみると、みんな、少しも一体感がなくて、労使の対立みたいな関係でしょ、そこらへんが初めから非常につまらない。「夫婦相和するために、夫に本音を語らなかつた」とかね、まったく。

本心に勉強してほしいと思うのは、その、婦人公論レベルでいいのよ。むずかしい本なんかとつてもこの方たちは読んでるヒマないと思うし。婦人公論でさえ、この人たちが言ってるよりもっと深い次元でいろんなこと書いてるでしょ。

もちろん、おかしなものもたくさんあるけれど、たとえば三月号の津川幸三氏のものなどこの連中にもみせたかったよ。津川さんって、スワッピング誌の主宰者なんだけど、それに一言もふれないで、

「夫たちがいくら大きな顔をしていても、いまの社会などはすべて妻の忍耐でできあがっていると、言っているほどのもので」と言ってるね、「どんな苦しいことでも割にあわないことでも、夫に愛されてるんだ」というただそれだけの理由で他の悪いところをほとんど棒引きできるほど、夫を大切にしているんだ」と言うあたり、この人たちにはわかんないだろうね。

そのほかいろいろ言っているけど、女は男次第だ、という彼の発言は、夫にとっても聞き流せないよ。

それから、よく社会主義の国へ行ってみたら保育所が完備して、女は安心して働け、子どもは非常によくめんどうみてもらってる…っていう例のアレだけど、よくに言わせたなら、女が子どもを生んで保育所に預けて一生懸命働いてる国なんて、情ない国だと思う。子どもを生んだら五つまで…とは言わないけど三つまでは手もとに置いて育てるのが当たり前だから、それができないなんていうのは男の働きがいないんだ(笑)。そういうときに、大いに社会が悪い、給与体系が悪いと叫んでほしいんだ。ところが社会主義ってのは、女も働かなきゃならないようになってるらしいが、少なくとも日本のような資本主義の社会だったら、女は子どもを生んだら三年ぐらいいは働かないっていう運動をやるんだってらむらしいと思うけど、北海道の意見を讀んだら、「あれもダメ」「これもダメ」、そんな感じがするんだなあ、Aさんなんかも、「共働きて家事分担してきただけで、妊娠して仕事をやめたら、知らないまに自分が気をつかっ

てで、外出するにもお伺いを立てるような状態になっちゃった。これはおかし」とかね。

◆オヤジをエラクするには

W 二人で分担してやってたときは生き生きして楽しくやれたわけなんですよ。

M きびしい言い方すると、女の人ってのは、やっぱり女なのよ。だから外に出るとチャホヤされる。そういうことが、非常に楽しい人ってのはある。だから、うちにいて子どもと二人でいるより、やっぱり社会に出ていくって言う。だけど、ほんとうに生きがいになる仕事なんて、男だってそうはないわけですよ。女性が生かがいと思ってる仕事は、それをしなきゃ食ってゆけぬかというところをしてないと、基地のような家庭にまたとじこめられる、というそんな生きがいが多いと思うよ。つまり家事やってるよりはいいという相対的な問題だと思っ

よ。男はね、仕事をして家族を養っていかなきゃならないってことがあるけど。ぼくの友人なんかには、少し古い奴だけれども、奥さんが働いてるときは家事の分担なんかもやるけど、家庭にこもったら男がやるのはおかしっていう奴がいる。そういう考え方は、ぼくは是認できない。それから、これは患者さんにもつても言うんだけど、「オヤジに風呂つかわせたり、オムツ取りかえさせたり、ミルクのませたりさせたら、オヤジはえらくならないゾ」って。大変わかったよう

な顔しているものもあるし、「えらくなるっ

てどういうことですか」なんて聞くのもある。(笑) そういう人は、えらくならなくともいいんだろうけど。それでもネ、ダンナが家事が好きで一生懸命やるものもある。それはそれでいい。だけど、このCさんみたいに、「夫は仕事、私は家事という生活になってしまいました。もったねばり強く教えたりすればよかったんですけども……家にいたら思考の後退、自信の喪失、焦りの蓄積で「突破口をみつけなくてはと、子どもを保育所に預け



て働き出したんですけども、夫とのトラブルがありました」なんての、あつたりまあだアと思うの。なんで働かなきゃならないの。家庭にいたら、思考の後退、自信の喪失、焦りの蓄積に、どうしてなるんですか? つまりこの辺から、性的に満足を得ていない女性像という発言になったのだけど、不感症は心身症というりっぱな病気だと僕は思っている。不妊症と似てて相手がいるが病気だと言ってるの。動物が性交でどれくらい満足してるか知らないけど、彼らは家庭を築いて

ないからそれはどうでもいいので、人間の場合は家庭生活をしているから、性的に満たされない女性性は、いつも欲求不満的なものがくすぶるから、例えばダンナのエクボもアパタにみえるし、ちよつとしたこともガマンできないという人間関係になるのね。電車の中でも、つまらなそうならしてると女とか子供をひっぱたいてる女とかみると僕はかわいそうに、夫に愛されているという自信がないんだわい。と同情してしまうんだ。つまり、ここで発言している人たちの素顔って、つまんなそうな顔してると思うんだ。座談会なんかでは才女らしく発言していても、よくあるじゃない。一人で町を歩いてるとき見かけて、あまりつまんなそうな顔してるんで、人ちがいかないなんて思う、あれ。

W わかる気がするけど、一人じゃできないわね。

◆ことばの遊びに過ぎない

M それから、これもわかんないナ。「もつともつと強い人間同志のつながりをも一度取り戻したい」「そのために離婚したいって夫と話しあってる」「でも、互いに離れてしまつたら精神的にも離れてしまつてふつきれずにいるの」なんて、バツカじやない。(笑) 離婚ってことを観念的にとらえ、実態をまったく知らうともしない。それでいてほのぼのとした愛情が……なんて、読んでいていやなつち

やつた。

W そういふのは、何もわかっていない人たちね。本もあまり読んでない。

M こういう人たちって、ことばのお遊びしてるって感じがする。

W いやになった、あきあきした。そういう気持ちになったから、いまの状態をまずゼロに戻して、なんてことどうまくいくと思つたら間違ひよね。今までやったのが蓄積されてるんでしよう。だから簡単につぶしてもう一編組み立てるなんて、そうはいかない……。

本音じゃなくて弱音に聞こえる。

M 北海道の前に読んで、「こんな人たちは結婚すべきでなかった」って書いてたら、へあごらの事務局の方が大変怒ってきた。「パートナーも、ほんとうに人間らしく生きてほしい。しかし互いが人間らしさをわちあうためには、社会通念、社会的慣習が重すぎる面がある」って。これはほんとうね。「自分だけがよければ、ということではない。隣の人も考えるとき、心ある人は痛みを覚える私たちは、隣の女、隣の男とも、苦しみや喜びをわかちあえる関係になりたい。その時に多分、社会全体がよくないのではないか。これはすばらしい発言だ、こういうわかっている人が、何かあたたかい目で見守りながら、こういうものをやらせてるといふ気がする。発言者たちの奥にあるものは、わかる点もあるけど事務局みたいに「そうかい、そうかい」って言つてたつて絶対ダメなんだ。もつと現実を認識してね。ぼくはこの人たちに言いたいんだ。じゃあ、自分は結婚し

ないでいたらどうだったのかわかって。どうもこれ読んできると、結婚してよかったって思ってる人があまりいない。もつといものを得ようと思ってる苦しんでるってことでしょうか、これで見る限りは、結婚すべきでなかった、みたいな発言をしている人が多すぎるように感じられる。

それから、夫の芽を摘み取っているようにみえる。というのは、発言者の大部分が、夫に協力的で、夫の仕事がやりやすいように、やりやすいように、やってみる人に見えないんだけどね、どうだろう。古いと言われるけど、夫にやらせて自分はそれをバックアップする。そのほうがうまくゆくにきまってる。それ自分も出ようとして、結局両方うまくゆくことは少ない。もちろん夫がどういう状況にあるかによってもちがうことだけどもね。

W 家にいることの意味ね。

M つまり、あんたばかり仕事して、私は家において……という欲求不満が全面に出てる。敵だとか、たたかいたとか……

「結婚という一つの社会制度の敵のワナにかかった」——こんなことを恋愛時代に言ってたんでしょかね、この人は。

W そんなことないでしょうねえ。

M お見合いかどうか、それは知らないけどね。「たとえ一夫一婦的な気持ちでいる人でも、もしその関係が崩れてしまったときには、子どものために離婚しないというよりは、別れて育てるほうが子どもにとってよいと思う」なんて、こんなことはこの人が言わなくても、もう、

いろんな人が書き立ててるでしょう。だからこんなふうにあまりにも簡単に言っただけじゃないのよ。それから、スウェーデンの話なんか出てくるけど、これを日本に持ってこられるかどうかは全然おさまいなし。ばくはむしろ、スウェーデンの人が、日本の、今はダメだけど、もうちよつと前の家族制度を見たら、逆にうらやましがったんじゃないかと思う。

W あまりに個人が強くなると、自分たちだけを主体にした生活をやっていた場合には、断絶なんというんじやなくてほんとうに取り残されていく老人たちがたくさんいるんですよ、外国には。



「結婚という一つの社会制度の敵のワナにかかった」

M だから、自殺が一番多いとかね。この人たちは、そういう人はご自由に死んでくださいっていうかもしれないけど、なんかこう、非常に一面的なところだけ

とらえてね、象のしっぽだけ見て象は、細いって言うって感じだなあ。「一般的に言われている夫婦一体というのは、一方的に女が男に合わせるって意味でしょう」って。これも簡単に言うてるけど、とんでもない。「女は生き方を干渉されて窮屈になりながら、心の中で

は別々ということもある」とかね。まったくだから情ないね、こういう女の人は。W この方々のご主人の話も伺いたいわね。

◆性的未熟では？

M こうなると、いわゆるただの同居者であってね、いわゆるセックスの喜びを知らねえんじやないか……というところへ来るわけよ。アパート別々に借りるよりは一緒にいたほうが安いとか便利だとかで同棲するのはちよつと違うかもしれないけども、そういう性生活の面でも成長してない、そういうものを感じるわけ。

だから、ほんとは、この方たちに、そういうアンケートでもとってみれば、大変おもしろい。またこんなこと、私に言わせるよりも、桐島洋子さんとか樋口恵子さんあたりにこれを見せたほうがいいんじゃないかな、桐島さんなんか、これ見てきびしいこと言うでしょう。これ読んで次元が低いつて言ったら事務局の人から叱られたけども、まあこれは吉武輝子さんのレベルじゃないかな。いろんな政党があるように、いろんな立場もあっていいわけだけど、この人たちの立場については、しっかりと立場なかどうかか本音じゃなくて弱音で気がするなあ。

「私は、よりかかるとして、夫と一緒にいるのか、それとも本当に独立した人間同士がお互いを共同生活者として認め合っているのか、二人の関係をはつきりみつめたい感じだ」なんて、これも非常に観念的だね。やっぱりお互いにより

かかって、人っていう字ができるわけでしょう。なんか言葉のお遊びとしか思えない。共同生活者として求め合ってるって、どういう意味かな。

W うん。

M 「お互い一回きりの人生を拡大しようために結婚した」——これもわかんない。「この頃また離婚を考えてるけど勇気がない。経済的にはやっていけると思うけど、さびしくなるのではないかと心配なの。だけれども、結婚では、本当の人間同志の深いつながりが持てないような気がする……」——どうなっちゃうてるんだろかねえ。

W 言葉のおあそびね。

M このGつて人、四十歳、結婚十八年、子ども十六歳(障害児)、十二歳。……おかしいね、障害児なんかいいたら、もつと夫婦つてのが密接になると思うんだけど、もつとも僕だったらと言うのが通らないのも夫婦、つまり他人は他人ね。結婚を一言で言うなら、相手の喜ぶことが自分の喜び。つまりこの人々には人間のコミュニケーションの基本みたいなものが全然欠けている。だから結婚外でもいろいろと挫折があると思うな。それから合唱団の仲間同士の結婚で、奥さんがつわりになつたり子どもできて来られなくなると、「あんたばかり行ってずるい」って必ず足引っ張って結局夫婦とも来なくなる例があるけど、そんなことで本当にいいんでしょかね。コーラス仲間結婚したんでさえこういいうのが時々あるわけよ。そうなると、これは人間教育の問題かな……。



♥あごらの基本は？

M 斉藤夫妻の言葉を聞いて一体どう話していったらいいのか迷っちゃうんだけど、まずどう感じたかから話してみたらどうだろう。

W そうね。

M 僕がまず感じたのは斉藤氏は本当に「あごら」を読んできたのか疑問に感じただけ、どう？

W うん。「あごら」の基本になっている女の痛みっていうものがこの人には何も伝わっていないんじゃないかって思う。たしかに「ヘミニ11月号」結婚についてホ

ンネを語る」っていうのは長い時間をかけて話したことを、ごく短くまとめてしまったでしょ。一つ一つ生活の重みをもって語られた言葉がポンポン出てきたように読まれてしまうし、背景をまったく知らない人が読んだら全然ちがう受け取り方をされてしまう危険もあるのね。

M それは、書かれた文章の限界としてはあるね。だけどこれは「あごら」の流れの中で読まれるでしょ。ところがその基本線がまったく理解されていなくて、むしろまったく反対の視点から読まれているっていう感じだ。だから「あごら」をどう読んできたんだろうって思うんだ。

W そうなのね。ま、たしかにこれを読んで「ついでにいけない」って言った人も「あごら」の中にもいたけど。

M それはいいんだよ、いろんな人がいいいんだから。

W うん。だけどこんなにもズレて受け取られちゃうのって、ちよつと驚いたわ。例えば、この人の論を聞くと、男が女を養って、女が働かなくても豊かな生活をできるよにすれば問題解決みたいな面があるけれども、実はそういう家庭生活の中で女たちがどうしようもない焦燥感や苦しみを持っている。そういう女の痛みを私たちはとりあげようとしてい

M そういう女の痛みというものが斉藤氏には実態としてつかめてないから見当ちがいの言葉がでてきたんだと思うよ。

W そうなのね。そこで斉藤氏のおつれあいの方はもうちよつと何か言葉があるんじゃないのかなって思ったんだけど。

M そうなんだ。その点で感じたことは、これ対話って言ってテープ送ってきたけど対話になってないよな。ここにも夫婦随っという男と女の関係があらわれていると思うんだけど。

W うん。おつれあいの方がうなずくときに、全体としては賛成なのかも知れないけど、自分自身の言葉で何か少しでも展開してほしいのね。そのときに男と女の立場の違いからくるちよつとしたニュアンスの違いのようなものがあると思うし、その違いを大事にしてお互いに受けとめなおしていくときに、対話も理解も豊かに深められるでしょう。

M それ、女の側の発言はなくて、ただ男の発言に賛成なんですつて一つにまとめられていくところに男と女の関係の一つの盲点があらわれてる。まあ、僕のオヤジたちの会話ってわりとこんなふうで別に疑問も感じてないようだから世代の相違ってことも大きいのかも知れないけど、それにしても僕なんか斉藤氏の言葉を借りれば「伸びる芽も伸びなくされている夫」として気の毒がられている。(笑) だけど僕に言わせれば、愛する女性と独白みたいな会話をしている、本当に豊かな対話の楽しみを知らない夫たちのほうが気の毒だと思うけどね。

W 本当。

♥優しいダンナ様への？

M それとね、ちよつと感じたんだけど、斉藤氏は絶対女にはなりたくないんじゃないかって気がする。男の立場で性別役

割分業論をとって、自分は広い社会でやりたいことをやる。けどもし女で、結婚したらそういう可能性をつみとられちゃう。そんな女の痛みを、絶対女にはなりたくないって気持ちで実は直感しているはずだと思うんだ。

W 斉藤氏がそうかどうか別としても、絶対優位に立った男として、女に理解をもった男ですつて自己満足してる人はたくさんいるわね。

M そこで思い出すのはアメリカの黒人差別。あれは今では誰でも反対するよね。黒人は黒人だというだけで伸びる芽もつまれて「ダンナ様」の農場内の奴隷労働に縛りつけられる。そういう黒人の奴隷労働に支えられて白人だけが思う存分に芽を伸ばす自由を享受していた。だからそこで黒人に対してどんなに良いダンナ様ぶりを発揮したところで、黒人奴隷制を否定しない限り差別者であることに変わりない。それと同じような図式が男と女との間にもあるよね。それなのに黒人差別には批判を持ちながら男と女の間をそれを見れないのはなぜだろう。

W それは、黒人も白人も同じ人間だつて言えるけど、男と女の場合は生まれつき異質なんだつて言うからでしょ。男と女は異質で、男は外、女は内にむいてる。男は家の中で一生オサンドンに明け暮れるなんてイヤだけど女はそれが幸せなはずってレッチルをはってしよう。

M だけど黒人だつて昔は白人とは異質の人間だと言われていた。黒人は奴隷として生きるのが自然なんだつて。だから男と女の場合もただ異質論だけじゃない

と思うな。結局、それが男にとって都合が良いからなんだよ。もし女が男と対等に外の社会で行動できるようにしていくとなったら、具体的に個々の男は、これまで女に負わせっぱなしだった家事育児を分担していかねければならない。これは男にとって、ある意味では白人が黒人奴隷を失う以上に辛い。だから男女の体が筋肉労働に強いかストレスに強いかなんてのは性別分業論の根拠でも何でもない、性差別の隠れみのなんだよ。



W 今の社会労働の場で男女の体力の質的差異がそのまま問題になるところなんて本当に少ないんだしね。むしろ福祉施設なんかに行ったら、身体の不自由な人の介護という肉体的重労働にたずさわっているのはみんな女で、施設長のイスに座って高給取るのだけ男だつてことが多いわでしょ。ここにも性別分業制から派生した性差別を見るんだけど、ま、とにかく男女の体力の差異は、性別分業制を主張するには説得力を欠くわね。
M この辺で、問題点を幾つか具体的にとりあげて話そうか。
W まず「こんな家庭生活を送っている

もプラスにならないと思っっている人たちがいろいろ言ってる」つてとらえ方をしとるでしょ。でもそこがまず違う。

♥ 円満夫婦の心の内は？

W 私たちは初め「ミニ2号」夫について「ホンネを語る」を読んで、こんなに古い結婚生活をしているのかと驚いたのね。夫婦相和して家庭生活を円満にするために、まず女が折れて、ホンネを抑えて生活しているってこと。

M 女が自分を殺して男を立てるっていう在り方が歴史の中で美德とされてきたけど、そこまで古い形ではないにしてもその要素が残っているんだね。
W だから表面的には夫婦円満な恵まれた家庭生活を送っていても、女の内側に一歩はいつてみると語れないホンネが渦まいてる。これで本当に良い夫婦関係と言えるのか、もっと男も女もお互いに理解し合い生かし合う形で夫婦関係を持ちたいという気持ちで、へあごら東海の人たちは模範し始めたわけね。
M その第一歩が、夫にホンネを語り続けてみようということだった。

W うん。その点ではへあごら北海道の人たちは既に相手にホンネを語り続けていて、男との間により真実な人間関係を作ろうと努力してきている。だけどそれにもかかわらずいろいろな問題がある。
M それは個人の問題と社会の問題とがからまっているから二人だけの意志では解決していけない面が大きいためでしょ。
W うん。だからどうという方向にむかっ

て、どういうふうな問題にあたっていいばいいのか、その実態や真相をよく知るためにホンネを語りあったわけ。夫にだまされたと思っっている女たちがヨワネを言ってるなんてことではない。

M 僕は斉藤氏がGさんの発言を一笑にふした態度を腹だたく思っただけで、Gさん夫妻にお会いしたとき、もう結婚歴が長いのに何かとてもウイウイしさを感じさせるような睦まじいカップルだなと思っただ。Gさんが離婚を口にする場合、それは今の日本の結婚生活にまつわる矛盾や圧力の大きさを問題にしているんであって、「イヤになったからゼロに戻そう」なんて次元の発言なんかじゃあ全然ないんだよな。
W うん、そういうふうな全面的にズレて受け取られちゃったのね。



M それからこの「夫の仕事をやりやすいようにやりやすいようにやってるんだらうか」とか「家事なんか手伝わせてたらオヤジはえらくならないぞ」とかいう言葉が聞くと、オヤジの話を聞いているような気分になるんだけど、僕たちが問題にしている事がからは全然ズレちゃっ

てるんだな。

W 私たちはむしろ「夫が仕事をやりやすいように」ということばかりを第一命題にしてきた妻のあり方、夫婦関係、そういう社会体制というものをこそ問題にしているのね。斉藤氏は「えらくなる」っていうことを疑問の余地なく肯定しているようだけど、そのなかみか実は何なのか、それで社会がどうなったのかわかっていうことの吟味が無いでしょ。

♥ 「えらくなる」って？

M この「えらくなる」っていうのは、話の流れの中でとらえると、「全人格的な成長」というような事柄として言われているのではなくて、いわゆる立身出世のことだね。女が家にいて、夫の仕事がやりやすいようにひたすら内助の効に励んで、そのうえで男が外でバリバリ仕事をし、出世するってこと。

W その結果、男たちは仕事以外のことは何もできないし関心も持たないといった仕事人間になって、日本は驚くべき高度経済成長をとげ、公害大国となつて、日本男児はエコノミックアニマルとして世界中の嫌われ者になりましたと。

M まあ、そう言っちゃわないでさ。たとえその「外でバリバリ仕事をする」つてこと自体の肯定的な面を見るとね、それをなぜ性別によつて男だけの特権にして、女にも同じ可能性を与えようとして、女にも同じ可能性を与えようとして、男はこれまでに女に押しつけてきた家事育児とい

ったことを女と同じように分担していかなければならない。それは男にとって辛い犠牲なんだけれども、考えてみればこれまで女は生活全部がそういう犠牲だけだった。

W その犠牲を女らしさとか女の特性とか愛という言葉で強いていただけね。

♥相手の痛みを愛で知る

M うん、だからそれを男が分担していくというのは男の特権の上にアグラをかけたものにとっては幸いなことなんだけど、そこでやっぱり、愛によって相手の痛みや喜びを自分のものにしていくという姿勢が男の側にも生まれてこなきゃ、本当は愛だと思うんだ。

W そうなのね、「相手の喜び」が自分の喜びという本来の人間のコミュニケーションの基本」ということを斎藤氏は言ってるけど、そういうことが今まで女の側にばかり一方的に押しつけられていて、男の側でどれだけ本気にとらえられてきたかということは、はなはだ疑問。

M それが面白いことに、相手の喜びが自分の喜びってことを、人間関係の基本というよりも、男に対する女のあり方だっているか、それが女の幸せだと思ってる女性が多い。それでこれ、自分自身の主体性を放棄してしまうような極端な形でとらえられていることも多いでしょ。

W それは小さいときからの環境教育のせいじゃない？ 女はそういうものだ、女の幸せはそこにこそあるんだっていう

情報ばかりがふれている。婦人雑誌なんてまさに、いかに女を男に従属させておくかという一点にしばって、あの手のバラエティにとんだ編集がされている。女が受ける情報は、マスコミ界の99%を占める男たちの視点による男本位の情報ばかり。そんな中でなんとなくそう思いこまれてしまう面もあるし、実際そうしなければ生きられなかった女の歴史がごく身近にあるわけですよ。

M うん、そこにもまさに「女は造られる」っていう一面があらわれているね。

W それから「子どもが生まれたら三つまでは手許で育てるのがあたりまえ」って言葉だけでも、これはあまりに現実内容を知らない男の発言だと思う。今、育児ノイローゼだと幼児受難だとかいろいろ問題がおこっているけど、女の個人的な家庭育児っていうのは、母性が生かされるというよりむしろ、その女の「母性」以外の人間性がみんな奪われてしまような状況、個性や能力をみんな犠牲にしなければならないような状況なわけね。

M 女自身が、子育てが生きがいだと言う場合でも、さまざまな可能性の中でそれを主体的に選んだというよりは、他の可能性がみんな摘まれてしまった状況で、自己の存在理由を確かめるためにそこに逃げ帰ったという感じの人が多いね。

W だから個々の女のホンネを聞いていくと、幸せなはずとされている子育ての生活の中でなんとも言えない虚しさを感じているという姿が大きく浮かびあがってくる。ところがそういう女の苦しみや



痛みを男は見ようとしれない。

M 女らしさが欠けてるとか、これまで女はみんなやってきたことなのにわがままだとか、あげくのほたては性的欲求不満ではなんて飛躍したりして、狭い「母性」のなかに閉じこめられてしまった一人の人間としての叫びをまともに取りあげようとする姿勢がないんだな。

♥「子育て」を見直そう

W それと、育児を子どもの側からとらえて、子どもが育っていく「子育て」の望ましい状況とはどういうものなのかということも考え直してみたいと思うのね。育児以外の可能性をつみとられてしまった母親という一人の女性に、母子ベッタリ育児をされるのが子どもにとって本当に望ましいことなのか。

という状況の日本の家庭では、子どもは欲求不満のテレビっ子になってしまおう。広い庭や公園で遊べる恵まれた子どもにしても、たえず母親の声がかかる所での行動に限られるという点では本質的に母子ベッタリ育児と変わらない。子どもが父親と接するのは休日ぐらいのものだし、結局今の家庭育児というのは母親だけというかたよったスキシップが過剰な子育て環境だよな。

W うん。これじゃ子どもがかわいそう。本当に子育てに望ましいのは、母親も父親も、それ以外の大人や子ども仲間もといったさまざまなスキシップが適度に得られる環境だと思ふのね。

M そこで集団保育の場としての保育所の意義が認められてくるわけだ。

W 今の日本の保育所をそのまま良しとするわけじゃないけれど、保育所というものを子育てという観点から積極的に評価して、より良い保育環境の充実を目指していく必要があると思う。それは子どもたちがみんな、親の経済的社会的状況にかわりなく平等に、望ましい教育的環境を保障されるという点でも、とても大切だと思うのね。子どもの活動に合わせた施設とか、広い庭とか、あそび仲間たちとか複数の保育者たちとか。でも、もちろん施設に入れっぱなしというんではなくて、父も母も子どもと一緒に過ごす時間を充分に確保できるように社会にしていきたいと望んでいるんだけれども、そういう意味でも、仕事をもっている男も女も、もっと生活者としての時間をもてるように、全体的に労働時間を短縮し

♥ スキンシップも間違えよう

ていくというのは大切な課題だと思う。

M うん、特に父親のスキンシップは見直される必要があるね。それから母親のスキンシップに関しては、そのなかみをもっと問われなきゃならないと思うんだ。ただ接していれば良いというのではなくて、母親がどういう姿勢で生きているのか、それを子どもは見ているわけだよ。

そこで母親が夫と子どもの身のまわりの雑事だけに追われて夫に依存して生活しているのか、それとも一人の自立した人間として社会の中で自分自身の足場をもって生きているのか、そういう生きる姿勢のちがいは当然スキンシップのなかみにも反映してくる。母親がゆたかに生きることは子どもにとってもプラスになるんだよね。

W こういうことを考え合わせると、育ちの望ましい環境というのは、母親が働き続けていくということとちつとも矛盾しないのね。むしろ「三つまでは手もとで」というあり方のほうが子どもにとっても望ましくないし、母である女にとつては不幸な方だと言えるでしょう。

それから「コーラスグループで結婚した夫婦が、子どもができて妻が出られなくなったら『あんたばっかり』って夫の足をひっぱるから夫も出られなくなる。そんなに良いんでしょうかね」って齊藤氏は言っているけど、それじゃあ、子どもができたなら、それまではコーラスをやったりスポーツをやったりしていた女が

全部子どものためにそれをできなくなつて、夫だけがそれをやり続けられる、それで良いのかって、むしろこつちから聞きたい。そこでどうして、子どもがいてもいなくても男も女も、そういう個性を生かした活動を続けられる環境作りをしようと考えないのか、どうしてそういうふうな発想に行かないのか。

M 子どもができて男も女も両方とも出られるようにする、それは子どもをジヤマにするのではない。むしろ、子どもがいる状況をアブノーマルな一時期としてとらえて子どものためにその期間大人が犠牲になるというのをやめて、子どもがいる状況を人間社会のアタリマエの状況としてとらえて、その状況でどうやって子どもも大人も両方を生かしていけるか、それを考えたいわけだよ。例えば



まず第一歩としては、せめて夫と妻がわかるがわる出るといふような形でもいいんだよ。それさえしないで、常に妻はが

マンして夫だけ出るといふのが多いんだから。

W うん、そうね。だけどやっぱりその「かわるがわる」ってのも問題だと思うよ。そうすると結局、結婚前は二人で一緒に参加していた活動が、結婚したことうによって別々にしかできなくなつてしまう。趣味のサークルでもボランテア活動でも、あるいはコンサートとか二人でお酒飲みに行くこととか、それがみんな夫婦一緒にはできなくなつて、せいぜいそれぞれ別の仲間と別々の時についてことになつてしまう。結婚する前は何でも一緒にやつて話題もゆたかだった夫婦が、子どもができたなら、女は育児・男は仕事の生活で、たとえ何かやつても夫婦別々という形が普通になつていつの間にかお互いの意識や感覚がズレてしまつたつて話がよくあるでしょう。

M 僕も、結婚した女友だちと久しぶりに会つてガツカリしたことがあるけど、子どもとダンナのことしか話題がない。いろんなことに関心を持っていた活発な彼女がこんなにもタイクツな女に変わつちやつたのかつて正直言つて驚いた。だけどこれは、育児に追われて社会との接点は夫だけというような生活を続けていたら、ある程度しようがないと思うんだ。

W 「結婚したら『待つ』ことだけの生活になつちやつた」って妻が嘆く一方で「結婚したらツマラナイ女になつた」つて文句を言う夫も多いわね。女だけを子どもに縛りつけたり、子どもゆえに男と女をバラバラに引き離すことがないように工夫していくことは、夫婦の関係にと

っても大切なことなのね。
M うん。それは例えばベビーシッター制や、いろんな保育制度を普及させることとか、方法はいろいろ考えていけると思うんだ。ところがその「育児は母親の手で」といった発想が、そういつたいろんな工夫をしていくことを防いでいるんだよね。子育てを母親だけとか両親だけの負担にしないで、社会全体で具体的に支えていこうという発想に切りかえていくことがまず大事な。

♥ ライフサイクルの落とし穴

W そうなのデス。それから「三つまでは女が手もとで育てる」っていう女の生き方の社会に及ぼす影響もとらえておきたい。つまり、女は結婚が出産まで働いて、子育てで家庭にはいつて、それから再就職または趣味やボランテア活動に生きるつていうライフサイクル。これではいつまでも女にはやりがいのある仕事なんて与えられない。若いときは、どうせ腰かけなんだからと、補助的な仕事だけに限定されるし、中年になつて再就職といつたら、家事と両立できる奥様パートということ、人をバカにしたような低賃金の単純労働が待つているだけ。

M あるいは、もし非常に恵まれた状況にいて、とてもやりがいのある仕事もつていたとしても、育児のためにいつたん家庭にはいつたら、もとの仕事を継続できる可能性なんてまずないね。せつかくの能力をまるつきり生かせないような仕事しかない。

W 「なんで働かなきゃならないの？」
 っって言われるけど、女ゆえにほんの数年の育児のために伸びる芽つまれてしまいう人生、あとは「夫の仕事のやりやすいように」忍耐して夫に合わせて家事に明け暮れながら、支障のない程度の趣味に生きる人生に満足できるかってこと。

M 僕ならイヤだよ。Cさんが言うように、思考の後退・自信の喪失・焦り……そういつたいろんな不安や不満が出てくると思う。

W そう、自分の身に引きあてて考えてほしいのね。それからまた女たちがそういうライフサイクルをとることによって、女全体にわたって職種の制限や低賃金が固定化された、例えば母子家庭の貧困というような問題も固定化されてしまいうでしょう。母子心中や子捨て子殺しという事件にしても、「女は家庭」というタテマエ社会の中で、女が母としての責任だけ負わされて自立の道が閉ざされていることが大きな要因になっているわけで、個人的な女の母性本能をウンスンしたとろで解決にならない。

M そうなんだ。女が一人の男に所属して生きなきゃならない性別分業社会そのものに根本原因があるんだからね。

♥性別分業制こそ女の敵

W 性別分業制こそが、女のさまざまな不幸を生みだしている大もとだってことね。そこで、男女平等とは何なのかっていう基本に戻るけど、平等っていうのはまさに「国家の小事も大事も男女が同じ

ように運営にたずさわっていること」「パール・バック」男と女は異質だから外内っていうんじやなくて、異質な者が外内においても内においても、小事大事も対等にかかわって、協力しあってこそ良い調和が得られる。小事であっても大事であっても、何か、事がら自体が男らしいことであつたり男らしくないことであつたりするのでなくて、その事がらに男と女がかかわったときそれぞれ男らしさや女らしさが自然に持ち味としてあらわれて相補いあえるんだと思うの。

W そういうことだね。ただ、男らしさ女らしさということを言いだすと切りがなくなってくるからこれはちよつと置いておいて、いま我々が性別分業制を否定する出発点になっているのは、男であろうと女であろうと誰かが何かをしたい、しようと思んだときにそのことをできる自由、それを大切にしたい、性別の違いで差別してはならないってことでしよう。性別分業制の社会では、女だけが仕事か家庭か、あるいは仕事か子どもかといった人間として不自然な選択を余儀なくされてしまう。これはやっぱり性差別だね。一人の人間として自分の人生をどう生きるか、それを性で規制されてしまうんだから。

W そうなのね。性別よりも個性が尊重されて、その人がどう生きたいか、その自由意志が尊重され生かされる社会にしていきたいのね。

M 「男だつてそんなに生きがいのある仕事につけるわけじゃない」って言うけど、でもやっぱり男には自分の力で

自分の人生を切り拓いていく道がひとまず与えられている。だけど女には最初から原則として道がとぎされてしまつてる。W うん。女は家庭にというタテマエ社会では、女は最初から補助的業務・非熟練単純労働の場しか与えられない。やりたい仕事があつても採用試験すら女ゆえに受ける機会が与えられない。そして「あなたは女なんだからサツサと家庭にはいつてダンナに養ってもらつて生きなさい」と社会が要請する鑄型の中にジワジワと押しこめられてしまう。



M そういう女ゆえのくやしさっていうものを無視したままで、性別分業制は特質を生かした男女平等だなんて言い切つてしまつたら、それは人間として思いやりが無いというか、フェアじゃないな。

W そして「女は家庭に」の社会では女が経済的に自立して一生やっつていこうという道は非常に困難でしょ。それに女が結婚しないているのはヘンに見られるし、そんな中で独身女性性は経済的法的にいろいろ不利なだけではなくて、そういう精神的な圧力も大きい。特に「世間並み」志向が強い日本ではね。日本の結婚率は世

界でもトップだそうだけどそういう結婚至上主義的傾向が女をますます男の奴隷化させていくということもあるのね。若い女は結婚相手を見つめるのに必死で男に気に入られよう気に入られようとするし、主婦は夫から離れたら自活の道がどんなに困難かわかるからやっぱり夫のご機嫌を伺わざるをえない。それは愛によってというよりむしろ生活がかかっているわけ。それが女の男に対するこびだとか奴隷根性のようなものを生みだしているのね、ちよつときびしい言い方だけど。M どんなに対等な分業だと言つても実質的に「養つてもらつてる」側は「養つてやつてる」側に対してどうしても弱いよね。

W それが生活の中のいろんな面に反映されるでしょ。例えばお金の使い方や実家とのつきあい方にしても、夫の実家に援助するのは当たり前でも妻の実家に援助するのは気がねが起きるとか、ふだんはわりと対等にしていても一家にとつて重大なことを決めるときには必ず最終決定権を夫が握るとか、妻の自主的な活動も夫の許容範囲内というような制限を受けるとか、常に夫に対してサービスマスターの役割に慣れている妻は、セックスにおいてもそういう感情をぬぐいきれずにいるとか。

M 対等な分業というけど実際は男女間に主従関係をうみだす分業なんだ。

♥効率第一社会の安全弁

W うん。今は家庭内での男女間の問題

を見たけど、社会の中で性別分業制がどういう問題点をもっているかということを見なければならぬと思うのね。まず、産業社会において性別分業制というのは効率第一主義をおしとおしていくのに非常に好都合。「産む性」に対して母性保障をしていかなければならないというのは効率第一の企業側にとって負担なんだけど「女は家庭に」と言ってる個々の家庭で負わせてしまえば楽でしょう。

M それに家庭にはいつて家事育児に専従する女がいれば、男には家庭責任など一切分担できないほどの長時間労働に従事させることができる。管理体制のしめつけに対する男の欲求不満も、個々の男に従属してサービスマンに専念する女が家庭で待っていることによって、ある程度解消できるし、「妻子をかかえている」男の企業への帰属意識も強化させられるわけだ。

W そして企業側にとって必要なときだけ差別的な低賃金で女を雇うことができる。どうせ女は家計補助的な収入でいいんだからってことだね。そのうえ、女は家庭で家族の身のまわりの世話をするのがアタリマエの社会では、保育施設の充実とか老人介護制度の普及といったさまざまな福祉政策のサポーター・ジュガができるでしょう。

M そこで苦しむのは母子家庭とか、共働きしなければやっていけない家庭の子どもだとか、老人世帯とか障害者家庭だとか。結局、効率第一主義のワタカらはみだしてしまう社会的弱者にいろんなシワ寄せがいく。そういう社会体制を

性別分業制が補完し維持する役割を果たしてしまおうんだな。

W うん。今、障害者ってことが出たからついでにふれておくと、性別分業制の社会では身障女性は二重の差別に苦しむということを見ておかなければならないと思うのね。この間、全障研（全国障害者問題研究会）の人たちと、障害者の恋愛・結婚問題を話していて感じたんだけど、身障男性はほとんど生活力の問題だけを気にしている。ところが身障女性は



まず容姿を気にして、そのうえに男性の身のまわりのめんどうをみる能力の欠如を気にしている。つまり、女が個々の男に所属して生きるところから出てきた女性の商品化と家内奴隷化の要求を、身障女性は余分に背負わされているわけ。

M たしかにまわりを見ると、身障男性と軽度の身障女性や健全女性の結婚というのはわりとあるけど、その反対に女性が男性から身のまわりのめんどうをみてもらうという形のカップルというのはまじないね。性別分業社会の中ではそういうカップルの誕生を抵抗なく受けいれる下地が生まれにくいし、身障女性の不幸

が放置されてしまおうんだね。

W それからさつきもちよつとふれたけど、福祉施設で働いているのは圧倒的に女性が多い。介護というのは非常に肉体的な重労働なのに完全な女の職場になっていてしかもひどい低賃金なのは、性別分業の発想からきている女性差別のあらわれなんだけど、そこで介護を受ける側の立場になってみると、慢性的な人手不足で疲れている介護者、それも平均勤続年数が伸びない介護者たちのサービスマンを受けなければならぬというのはやっぱり不幸なことよね。そういう意味でも、社会的弱者たちは効率第一主義社会のシワ寄せを負わされているし、そういう体制を、女たちがあちこちで安全弁として担ってしまっているでしょ。

M とところで「女は家庭に」のタテマエの下で女の半人前の低賃金がかかり通ってきたわけだけど、それが歴史の中でどういう役割を担ってきたかということも大きな問題だね。明治の富国強兵は、あの荷酷な労働と劣悪な労働環境、ひどい低賃金といった「女工哀史」の女たちを踏みつけにして推し進められたんだだけ、女には口をはさませない政治家たちによってそのまま日本は戦争に突入していった。戦後になるとこんどは、女の犠牲のうえてひたすら仕事だけに精を出す仕事人間の男たちと、半人前の賃金で働く女たちとの労働によってGNP大國を築きあげるのに成功した。これは男たちの生活者としての権利と女たちの労働者としての権利とを収奪した形で企業だけが豊かになったGNP大國だね。

♥キーセン観光を生みだすもの

W そして今や、ふくれあがった日本企業が韓国・東南アジアといったアジアの国々に経済援助という名の経済侵略をおしすすめているでしょ。「韓国通信」(韓国問題キリスト者緊急会議発行)なんか読んでも、明治の女工哀史そのままの状況を今訴えているわけね。

M うん。十五歳の少女たちがもう一人前の労働者として働かされていて、労働時間は一日十五時間、休日は月に二日のみ。そして飢える一歩手前のような低賃金だらう。ひどいねえ。

W そうした労働状況のなかで身体をこわす人も少なくないし、貧困と病人をかかえた家族の中で女の身売りが運命づけられてしまう。キーセン観光として知られている日本男性たちの恥も外聞もないセックスアニマルぶりを受けいれる下地を作っているのは、エコノミックアニマルと世界に悪評高い日本男性たちによる経済侵略にほかならない。こういう図式が築かれるのは、つまるところ性別分業制の中では認識されてきた女性差別の実態と女性蔑視の風潮のためだと思うの。

M うん。今の社会では男はどうしても女を下に見てしまいがち。家庭では自分が「養ってやっている奥さん」がせつせと身のまわりの雑用を片づけてくれるし、会社では男の半分ぐらいの給料で働く「女の子」たちをアゴで使える。雑用とかお茶くみとか。そして夜の町では女たちがこびを売っておせじも言ってくれ

るし「買う」ことさえもできる。こういう日常の中で生活していたら、男女平等なんて言われたってピンとこなくてもあたりまえじゃないかと思うんだ。

W そうなんだわねえ。

M これがもしも、家庭では自立している女性と一緒に家事育児なんかもみんな協力し合いながら生活して、会社では男とまったく対等な地位についている女性たちと仕事のうえで協力し合うというような日常生活になったら、ごく自然に女性を一個の対等な人格としてとらえられるようになると思うんだ。

♥ゆたかな愛は自立した男女に

W そういう社会では当然男も生活者として自立できていなきゃならないし、そういう面での具体的な責任分担もあるんだから、いわゆるエコノミックアニマルではいられないだろうし、それと同時に女を金で買ひあさるなんていうセックスアニマルになることもなくなるんじゃないかしら。

M なれないよ。だって相手の女性をね、妻であれほかの女性であれ、本当に対等な人間として見て、対等な関係をもってつき合っていくっていうことをしだしたら女性をそんな下半身の欲求処理の道具にするなんてことできなくなるでしょう。それに、本当に一人の女性と全人格的なかわりをもつて精神的にも肉体的にも満たされた愛の世界をもっていたら、セックスアニマルなんかになるわけがないでしょう。そんな気になれないはずだよ。



W その意味ではエコノミックアニマルセックスアニマルの男たちっていうのは、本当に対等な人格関係で結ばれた男女の愛の世界の喜びを知らないで、性の楽しさを単なる下半身の楽しさの次元でとらえている気の毒な男たちなのね。

♥アジアの女と痛みの連帯

W だけどそのセックスアニマルたちに踏みこじられているアジアの女たちの痛みを考えたら気の毒なんて言っちゃられない。韓国の人たちは、大戦中に日本軍が韓国の乙女たちを従軍慰安婦としてかりだしたことを、彼女たちを「軍需物資」として異郷の地に輸送し「共同便所」として「使い捨て」にしたこと(千田夏光著「従軍慰安婦」双葉社)を、今の経済侵略によるキーセン観光の光景にダブらせて想い起こしては、日本人に対して二重の怒りを感じていると思うの。日本の女

たちは、せめて自分の夫や友人男性たちを決してキーセン観光や、その東南アジア版に出かけさせてはならないと思う。

M 日本の男がアジアに女を買いに行くっていうのは日本の女にとっても屈辱なんだからね。そこで思うんだけどね、もし女たちが政治・経済といった社会の分野に男たちと対等に進出して働いていたら、こういった経済侵略・性侵略に大きなブレーキがかけられたらと思うんだ。たとえ経済侵略が資本の要請で必然的に出てきたとしても。

W そうなのね。「男は外、女は内」ってことで政治も経済もまったく男たちだけの世界になつていってしまう。女の痛みなど関知せずといったやり方で社会が動いていってしまう。特に司法界が男の世界であるためにどんなに多くの女がくやし涙を流してきたか知れない。学問や技術開発の分野でもそう。男たちが莫大な費用をつぎこんで研究を進めてきた科学の進歩のなかみは、軍事につながる核や宇宙開発といったものばかり。

M まあそれは国家の威信を高めるといふ外交政策的な背景もあるけど。

♥あらゆる仕事の分野に

W でもそれにしても、一方ではボタン一つで人類を滅ぼせるところまで行きついてしまったのに、女に関することや福祉に関するこの研究の立ち遅れはひどすぎるでしょ。いまだに女たちは本当に安全で確実で簡単な避妊の手段さえ手にいれてないし、さまざまな障害者たちも

もつと人間らしく豊かに生きる可能性を開かれて当然ではないかと思うんだけど。そういった面の研究はなおざりにされている。これまで常に弱者のかたわらに圧倒的多数として存在し続けてきた女たちが、科学技術の分野にも男たちと同様にかかわっていたら、もつと違った進歩が得られたのではないかしら。

M うん、そう思うね。たしかに利潤追求を第一とする資本主義体制の中で、直接利潤につながらない研究分野に対してはきびしいワクがつけられてしまうだろうけど、それでも社会のあらゆる分野に女たちが進出したら、男だけが支配している時のやり方に修正を加えることができるだろうね。産む性として生命をはぐくむ側の発想はいつてくるだろうから。

♥生命をはぐくむ発想を!

W その、生命をはぐくむ側からの発想っていうのが、今の社会に本当に欠けているのね。たとえば公害・薬害といったものにしても、もしそれを作り出す側に女が男と対等にかかわっていたら、もつと厳しいチェックやブレイキをかけることができたと思うの。

M それと、もし男たちが、妊娠・出産・育児といった女だけのこととされてきたことさらに、父性として女たちと同様にかかわりをもって生活していたら、やっぱりこんなひどい公害・薬害社会になる前にブレイキをかけられたと思う。一つの生命の重みといったものを生活実感として味わえる場から男たちがすっかり

切り離されて、管理社会の歯車の一つになりきってしまったことが、公害社会の大きな要因になっているんじゃないかな。

♥人間的な社会をみざして

W それとね、公害企業の中にいる男たちが内部告発できないっていうこと。たとえば水俣病なんて二十年も放置されていたわけでしょ。それにはいろいろの要因があったとしても男が妻子をかかえて企業に隷属さざるを得ないという面も大きかったのではないかしら。

M もし妻も自立していて、たとえ男がクビになったとしても妻の収入でやっていけるとなったら、それは男にとって強みだよな。男たちはプライドをもって、「もう俺の良心が許さない!」って内部



告発に立ちあがれたかも知れない。

W そういうことをみんなができるようになってこそ、今よりずっと人間的な社会に変えていける道が開かれるでしょう。だから、女が性別分業制なんていうクビキから解放されて自立できる社会は、男たちも企業への隷属状態から解放されて本当の意味で自立できる社会でもある。女の解放は男の解放にもつながるってこと。

♥性差別再生産にストップを

W まあそういうわけで、私たちは性別分業制は廃止して対等な人間関係を大切にしていこうと努力しているけど、これがなんとまあ困難なことか。

M これまであたりまえと思ってた男の特権を放棄するのは頭ではできても感覚的にはなかなかむずかしいし、何と云って性別分業あたりまえになつて

社会の中の結婚生活だからね。僕は生活者としての時間を作り出すために本当に苦心している。まわりの人たちはみんな家庭のことは、「奥さん」がやってくるといったペースで、仕事でもつきあいでも要求してくるわけでしょう。その中には自分自身、大事だと思ふこともやりたいと思うこともたくさんある。だけどそのペースにのっていただんでは家庭責任なんかとても果たせなくなってしまう。W 私のほうは再就職できなくて本当に

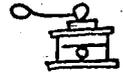
苦勞してきてるでしょ。それと、あなた「奥さん」ということでまわりの人たちが性別分業的発想からいろんな要求や期待をしてくるのに対して、どう対処していくか本当に苦心してきてる。日常的な細々したこと余計なマサツは避けたいけどゆずっていたらキリがないし、女性差別のことからの再生産に自分で荷担することだけは避けたいし。これはあなただの仕事の場での問題に関しても、何についても言えることよね。

M うん。小さいことからでも性差別をくずしていくような実践をしていきたいと思う。だけど今の社会の結婚形態の中でやっていくのは本当に大変なんだな。でもこれを話していくとまた長くなるから今回はやめておこう。ただ、今の結婚形態にまつわる矛盾を闘っていくにはもちろんいろんなやり方があるんだけど、僕たちはできるところまではこの形態のなかで、内部告発みたいな形で闘ってみたい、そんな気持ちでやってきてるってところかな。

W うん。お互いホンネを語りあって、理解と知恵を増しあいながらガンバリますか、敵なる同志よ。

M まあそう言わず「仲良し」でやっていこうや。(笑)

* * *
なお、この対話は斉藤御夫妻の対話テープを聞いた時点で行なったため、後に斉藤氏が加筆訂正なされた誌上の原稿とは多少、引用語句が異なっていることをお断わりします。ただし、氏が削除なされた発言に関する言及は削除しました。



ふたりで話してみたら



M 夫妻

↑ 27 28

M 女をしあわせにできるのはエリートだけなのかね。

W 男の経済力が女のしあわせを決定するとすると、しあわせになれる女は限られるみたいね。それも問題だけど、ても物質的に豊かても、しあわせとはほど遠いと思われ女っていったばいいわ。

M しかし、夫の話に妻がうなずくのが夫妻の会話かね。

W 夫唱婦随型の会話って、そんなものかもしれない。ところで、女が仕事をもつてはなぜいけないのかしらね。

M 氏は、男女分業論者のようだね。男と女の肉体的相違についてはいろいろ話されてはいたけど、それがすなわち、能力的相違↓社会の中の固定化された分業という図式については一切説明抜きだったね。

W 私は、男社会に「あごら」をかいた男が男の都合のよいように組み立てた論

としか思えないの。

M 確かに女がそれで本当に満足なら男はそのほうが楽だからね。だけど、家事・育児・その他雑用一般の生活に満足している女より、自立して生き生きしている女と共同生活をするほうが、それよりもっと深みのある関係が保てるってこと氏はわかってないだろうな。

F 夫妻

↑ 31 32

W 私たちは性の違いをお互いに尊重し合いつつ、性によるおしつけの役割分担はやめようと努力してきたんだけど。この人の意見を読んでどう感じる？

M 僕はメシのしたくをしたり洗濯もするよ。自分の生活のことだからなあ。でもこれをしてるからといって僕の才能の芽がつかまれるとは思わない。自分の身がらをそっくりあずけてくれる女性より自立している女性との生活の方が男も伸び伸びとできるんじゃないか。もっとも何でもやってくれる女性がいたら確かに便利だよ。これホンネ。

W 「あごら」の人たちのことをさんざんに言っているんだけど、これでも普通よりは女性問題に興味を持っているほうなんでしょうね。

M 彼なりの人生観としてひとまずスジもとおっているしね。でもそんな彼が「次元が低い」と言い切っている人たちに対してこんな挑戦的になるのかね。セックスのことにしてもこんなことを聞く

らないんじゃないのって言いたいような気がしてくるな。

N 夫妻

↑ 34 34

M 基本的には家事なんか男でも女でもどっちがやってもいいと思う。そのとき手のあいてるほうがやればいい。ただ、今の男の職場の状況では、時間的にも体力的にも大変だよ。そういう意味では分業もやむを得ない面は確かにあるよ。

W それは言えると思う。そういう状況をそのままにしておいて、妻も出るとなると、何が切り捨てられてしまうかという点を考える必要があるね。生活の部分は大事にしたいかないと何のために生きているかわからなくなるから。

M ただ、大部分の男は、それを口実にして逃げている面もなきにしもあらず。だけど仕事は、しなければ食っていけないし。

W とにかく忙しすぎるわね。もっと職場の状況がゆつたりとなればいいと思う。これは男も女もね。社会全体についても同じことが言えるわけだけど。

M それからね、女の解放って問題は、たしかに見えていかなきゃならないことだとは思うよ。だけど、おおかたの男は、見て見ぬふりしてるんだよ。

M 自分に都合が悪いからね、でも、男だつて本当は、とっても抑圧されているのね。気がついてないのかね。

M うーん、気がつかないふりしてるんじゃないかな。マンリブってのはないの

かね。

W ワッハノ それやるべきだね。ただ男のほうで、ごまかされる機会に恵まれるからね。酒の充てみたり、いろいろね。だけど、女たちはね、今の男たちと同じようになつて、そういうことをやりたいていってやるわけじゃないの。解放つていうと何が、遊びたいといつてるみたいに思われることがあるけど、本読むのさえ、夫からやめろなんて言われたりする女がたくさんいるのよ。

M そんなこと言うのは、男じゃないね。人間としておかしいよ。そんなこと言う男つてのは、よっぽど自分に自信がないケツの穴が小さいヤツだな。

W それと、「こういう人のダンナは伸びる芽も伸びない」ってこと、あなたはどよう？ さしづめ、あなたは私につぶされてるってことになるね、これだと。

M それは全くナンセンスだよ。つぶされてなんかないよ。お互いにお互いを見がきあって、成長していくんだから。あらゆることを話し合つて事から処理していくことができないような女と暮らしたいとは思わないね。ちゃんと自分自身の意見を出してやるのでなければ。

H 夫妻

↑ 38 34

M 斉藤氏の言葉は、まったく男の本音で、自分もホンネとしてはお前に対して

これを望んでいると思う。しかし、妻が家内労働だけをして家を守っているだけで、もし、男の俺が、経済的に全部責任をもたなければならぬと考えると非常に負担にもなる。男と女の結びつきは、経済的にも社会的にも生活すべて自立したうえでなされるのが理想であって、そういうところから考えるなら、理想とホンを使用している男というものは、エゴのかたまりかもしれない。

W それは今の社会の男としてわかる気もするけど、やっぱりエゴのかたまりをおしつけられるのは、たまらない。実際には、私自身も働いているし、あなたも比較的家の仕事をしているのだからいいけど、だけど、手伝ってやっているという気分ではなく、責任もって分担してほしいな。
M たしかにそうなんだけど、正直いってつかれるなあ。
W 今の男の仕事って忙しすぎるからねエ。

A 夫妻

↑○○30↑○○30

M 俺は、男女の役割分業はおかしいと思うよ。男も家事をやっていくべきだと思ふ。だけど、現実には、職場にとられる時間とエネルギーの量におしつぶされて、家事を分担していくのは、不可能に近いね。
W 今の状況ではね。だから、夫婦の問題としてだけ、とらえて考えるといふのは、少し無理がある。外側の状況が

変わらないと、個人の力では解決しきれない面があるんじゃないかな。
M うん。俺としては君が働くことも、いろんな活動をすることも、賛成だし、俺なりにできるかぎり協力したい。けど今の職場にいたら、日常的に家事育児分担していくのが困難なことは、たしかだ。だからといって、今の仕事は自分に向いていると思うし、職場を変える気にはなれない。そこで、何とか君も外の活動ができるように、俺なりの工夫はしているつもりだし、必要なときには、会社を休んでも育児分担したりして、協力してやるよな。

W それは充分わかっている。だから、あなたに対して不満だという気持ちはないよ。だけど、やっぱりこの状況では、私が仕事をもつてやっていくことはできない、というの厳とした事実なのね。
M うん、そうだ。だけど本当に、現状では、これ以上、俺はどうしたらいいんだ、どうしようもないじゃないかっていうのが正直な気持ちだ。
W 私も、現状であなたに、これ以上どうしろってことは、とてかわいそうて言えないと思ってるよ。ただ、この理想と現実のギャップを具体的に、私たちはどうするかよね。方法としてね。この状況のなかで何を選んでいくか。あきらめてしまいたくないけど、こういつた中で無理に論をおして、二人とも倒れてしまふのもイヤだし、やっぱり外側の状況を、少しずつでも変えていく運動をするというぐらいが、今のところ精いっぱいかな。

英語コンプレックスをなくす英語教室

まだ入れます。

ミニ3月号で参加を募りました英語教室に、まだ数人入れます。お早目にお申し込みを！

(時間) A 月曜午後六時〜七時半

B 水曜十二時半〜二時

(月謝) A Bとも五千円(あごら会員は三千円)

申し込みはハガキで事務局へ。

アルバイト募集

●ご自宅の近くの書店など「雑誌へあごら」など「BOC」の出版物をおいてくれる本屋さんを開拓し、さらに月に一〜二度書店に行き、本の売れ行きを見ながら、書店とつながりを持って下さる方。」
●女の集会などに出かけて「あごら」を売って下さる方。

いずれも、BOCと契約を結び、仕事としておまかせしたいと思えます。
例えば、子育て中だが、月に何日かでも仕事をしたい方、何人かで組んで共同保育をしながら……という方も歓迎です。詳細については、ご相談したいと思えます。(BOC出版部 担当・山田)

資生堂に

抗議のハガキ書いた?

ミニ3月号に「資生堂社長の女性差別発言に抗議しよう」と書きましたが、その筋の話によると、資生堂は「抗議し

あごらのあごら

てくるのは、主に東京在住の女性運動に関係している一部のハネアガリ女たちだとタカをくくっているらしいのです。

二月二十二日付、朝日新聞「人欄」登場した資生堂新社長の山本吉兵衛氏の、「今年は男だけ五十名採用した。子ども以外、ものを作るのは男の仕事だから」に抗議したい方、一人一人がおっくうがらずに態度を示していくことが、女性解放運動においては最も大事なことではないでしょうか。
地方の方、東京の方も、そうしたいけどまだの方、すぐに行動を!

京王線沿線の人集まれ!

ミニ2月号に「あごら京王」の連絡先を載せたところ、沿線の方々から連絡があり、さっそく三月十二日の夜、初めての集会を持ちました。今何を考えているか、あごら京王「てこれから何をやりたいか等々について話し合いました。

話していくなかで、企業で働くTさんの職場でのさまざまな問題、そこでの活動の悩みや援助を求めたいという話、家庭と仕事の板ばさみに悩むFさんの話、Jさんのアメリカ女性と日本女性の意識の比較、社会的地位の比較の話など、夜のふけるのも忘れて熱心に語り合いました。今後、考え行動するために、もっと多くの京王線の方々呼びかけたいと思えます。次の集会は四月二十一日(金)午後六時半から九時半、福井宅(TEL三〇八一七八七)でもたれます。(福井)

〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会	場
4月10日(月)～16日(日)					
10日(月)	10:00～17:00	婦人週間 テーマ「男女の平等と婦人の社会参加をすすめる」 ——慣習を見直し、新しい生活態度を育てる〈全国各地〉		福岡市天神	若田屋デパート
12日(水)	10:00～15:30	婦人問題特別相談〈福岡婦人少年室〉		愛知県婦人文化会館	
12日(水)	12:30～16:00	第30回婦人週間愛知地方婦人会議「男女の平等と婦人の社会参加をすすめる」 福岡婦人のつどい 講演「男性から見た女性の地位」益田憲吉、「慣習を見直す——外国での生活体験から」広中和歌子		福岡合同庁舎別館	3階大会議室
13日(木)	18:30～21:00	鉄連の7人とともに仕事差別、賃金差別と闘う会総会		渋谷勤労福祉会館	03-462-2511
14日(金)	13:30～15:30	第30回婦人週間北海道婦人会議 講演「女性の自立と社会参加」樋口恵子		札幌市教育分工会館	
	18:30～21:00	例会〈あごら九州〉		福岡市婦人会館	092-712-2662
	18:30～	労働分科会〈行動を起こす会〉		中島法律事務所	03-354-7010
	18:30～20:30	あごら19号編集会議		あごら読書室	03-354-9014
15日(土)	15:00～16:20	第一回集会〈あごら北東京〉		豊島区民センター	
	19:00～	ひにんと女〈ホーキ星〉		ホーキ星	03-341-9364
16日(日)	13:00～	男と女のための子ども講座「サマーヒル学園について」フィルムも上映		ホビット村学校	03-332-1187
17日(日)	13:00～16:00	婦人の要求を聞くつどい〈社会党 飛鳥田委員長 他		私学会館	
19日(火)	18:30～	第4期4月女大学「日本の働く女とアジア」〈アジアの女たちの会〉		渋谷勤労福祉会館	
21日(木)	18:30～21:30	第2回集会〈あごら京王線〉		福井宅	03-308-7871
22日(金)	19:00～	「政治を変えたい女たちの会」の今後を考える合宿(政治を変えたい女たちの会)		野沢宅	03-701-1508
23日(日)	13:00～17:00	男の子育てを考えるシンポジウム「労働と子育て」子供部屋あり 参加費200円 〈実行委員会〉0422-32-0578		立川市中央公民館	
24日(月)	19:00～	講座「女の生き方を考える」司会 青木やよひ 問い合わせ0422-54-0405		ホビット村学校	
25日(火)	18:00～21:00	結婚の意味を問う継続討論〈藤村 哲〉		豊島振興会館会議室	
	18:30～20:00	例会〈あごら北海道〉		北海道クリスチャンセンター	
26日(水)	0:30～16:30	福岡県南婦人問題会議 分散会 総会「男女の平等と婦人の社会参加をすすめる——慣習を見直し、新しい生活態度を育てる」		福岡県立南センター	
28日(金)	10:00～	例会「中世の女をめぐる」講師 名大 網野善彦〈あごら東海〉		名古屋勤労婦人センター	
	10:00～16:00	第30回東京地方婦人会議「しきりななかの男女平等」——私ならこう改善する——問い合わせ 東京婦人少年室(242)0772		渋谷恵比寿会館	
	18:00～21:00	女性史分科会 テーマ「高村逸枝とボーヴォワール」〈婦人問題懇話会〉		文化服装学院出版局5F応接室	
	19:00～	女とビデオ〈ホーキ星〉		ホーキ星	
29日(土)	13:00～	職場問題分科会「社会政策における婦人労働についての話し合い」 まとめ 駒野陽子氏〈婦人問題懇話会〉		千駄ヶ谷区民会館	03-402-7854
	18:00～21:00	「女・エロス」10号刊行記念集会「私のエロス・革命」講演 河野信子 パネラー 国沢静子、深江誠子、紫水十三子、末永蒼生他 整理券500円		渋谷勤労福祉会館	
5月12日(日)	15:00～	鉄連の仕事差別裁判		東京地方裁判所民事第6部	
13日(月)	13:30～17:00	例会〈あごら九州〉		福岡市婦人会館	
	14:00～17:00	全米女性会議その後と国際婦人年セミナー 報告 河野貴代美		四ッ谷公会堂	03-341-2991

ミニ11号の話し合いは私たちが痛みをもって話したもので、こんなにもズレた反論を受けたのは残念でした。個々の具体的な背景をもった話を、あまりに短くまとめすぎたために、他のあごらの読者の方々にいろいろな誤解やズレた印象をもたれたのではないかしらと反省させられました。それだけに、今度の対話集はどうしてもこれ以上短くしてしまいたくないと、差額をカンパで埋める決心が増べしにしましたが、まだまだ言葉足らず、力不足の感が強いのですが、私たちがなにより懸命に取り組んだつもりです。皆様方からの建設的な批判やカンパをぜひよろしくお願いします。 山口里子

- 各地のあごら連絡先**
- あごら北海道
 - ・岩見沢市九条西三丁目 山口里子
 - ・☎0126622411 6772 〒0668
 - あごら北東京
 - ・志木市幸町1-30 宮原マンション
 - ・☎0484774 3781 〒353
 - あごら武蔵野
 - ・小平市小川町1-173 丹羽雅代
 - ・☎04234311 6749 〒187
 - あごら新宿
 - ・新宿区新宿1-9-6 あごら内 斉藤千代
 - ・☎03335443941 〒160
 - あごら中央
 - ・杉並区荻窪3-7-9 305 長谷川知子
 - ・☎03339177427 〒167
 - あごら京王
 - ・調布市仙川町3-12-32 福井浅子
 - ・☎0333087871 〒182
 - あごら東海
 - ・名古屋緑区大高町小坂B 高橋ますみ
 - ・☎0526621108339 〒459
 - あごら京都
 - ・左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子
 - ・☎0757914623 〒606
 - あごら九州
 - ・福岡市西区笹丘町2-4-6 小島豊子
 - ・☎09255217624 〒810